

山口県小学校長会報

発行所
山口県小学校長会
代表者 田中邦明
校長会事務局
山口市大手町2-18
☎ 083-925-2919
FAX 083-925-6776
印刷所
大村印刷株式会社

新学習指導要領実施に備えた 校長の果たすべき役割を考える



山口県小学校長会 会長 田中邦明

一 はじめに

現在、中央教育審議会の各部会における学習指導要領改訂に向けての審議が終盤を迎えている。今年度中に答申が出され、来年三月には告示される予定である。今回の改訂のポイントの一つとして社会に開かれた教育課程がある。社会や産業の構造がめまぐるしく変化していく中で、どのような未来を創っていくのか、社会や人生をよりよいものにしていくのかを、子どもたちが感性を働かせ、試行錯誤をしながら新たな価値を見出し、いけるようにしなければならぬ。そのために、生きて働く知識を含むこれからの時代に必要となる資質・能力を学校教育で育成していくことが求められている。併せて子どもたちにどのような資質・能力を育成するのかを学校と地域が共通認識することが必要になってくる。さらには、それらを教育課程において明確にし、地域と連携・協働しながら実践して

くことが求められる。平成三十二年度全面実施に向けて、今後校長はどのような役割を果たしていけばよいのだろうか。

二 「資質・能力」中心の学力論に

子どもたちが「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を組み立てていくことが大切であるが、社会で生きて働く知識や力を育てるためには「どのように学ぶか」という学びの過程の質を高めていくことが重要になる。物事に対する多様な見方・考え方を身に付けて深く理解したり、様々な人との対話で考えを広げたり、学ぶことの意味と自分の人生や社会のあり方を主体的に結び付けたりしていくという学びがなされることによつて生きて働く知識や力となっていく。そこでその鍵となるのが主体的・対話的で深い学びであり、こうした学びになるよう授業を改善していこうとするの

が今回の改訂の主眼である。具体的には、言語活動や体験活動、問題解決的な学習などを充実させていくことが必要である。

また、幼稚園・保育園で育成している非認知的能力と言われるものも重要な学力として取り入れていこうという動きがある。非認知的能力とは、自分に自信をもって生き生きと活動できるとか、うまくいかなくても粘り強く取り組めるとか、友だちと助け合って仲良く妥協点を見出しながら作業が続けられるなど、人間性や情意と言われているものである。幼児教育の質が生涯にわたって影響する可能性がある。幼保・小連携について、校長は、スタートカリキュラムを実施して小学校にどうやって適応させるかという考え方はなくて、幼保時代に培ってきた能力をどうやって小学校に繋げるかという考え方に切り替える必要がある。

三 子どもの側に立つ授業づくりを

子どもたちの具体的な学びの姿を考へながら授業を構成していくことが必要であることは言うまでもない。指導論ではなく、学習論で子どもたちの深い学びを考えたい。深い学びについては、習得や活用・探究の中で、教科等の特質に応じて育まれる見方・考え方を働かせて、思考・判断・表現し、学習内容の深い理解や資質・能力の育成と繋がる学びを深い学びと捉えている。見方・考え方は、知識・技能を構造化して身に付けたり、思考力・判断力・表現力を豊かなものとしたり、社会や世界にどのように関わるかの示唆を形

成したりするために重要なものとなる。子どもたちが見方・考え方を自在に働かせられるようにすることこそ、教育の専門性を発揮する場面であり、そのような授業づくりを推進できるように校長自ら方向性を示すことが必要である。

四 内容を減らさずに深く学ぶ

各教科のものの見方・考え方をベースにして限られた時数内で深い学びや概念的な学び、主体的な学びを求めていかなければならない。そのためには、一つはオーセンティック（本物）な授業を実践していくこと。教科の学びが子どもたちの暮らしや現実と繋がっていることが重要である。併せて、教材のおもしろさに触れさせるために教材研究の仕方を変える必要がある。

もう一つ大事にしたいことは、教材の内容、教科の本質である。各教科ならではの、ものの見方・考え方、その教科を学ぶことが、人間が生きる社会を構築する時にどんな意味があるのか、教科の本質、その教科ならではの価値を追究したい。つまり、内容研究をきちんとやっていく必要がある。

五 終わりに

新学習指導要領実施に備えて、学校現場では大変さや不安も伴うものがあるが、大事なことは子ども視点に立ち、且つ確かな学びを見出すことである。学校の中で「こんな学びをつくらうよ」ということを校長がリーダーシップを発揮し、全教職員で話し合っておきたいものである。

研究紹介

豊かな人間性

豊かな人間性を育む

カリキュラムマネジメント

「コミュニティ・スクールを活用し、
地域と共に子どもたちの豊かな心を育む」

岩国市立愛宕小学校長

世良 泰章



一 はじめに

本支部では、豊かな人間性を育むカリキュラムマネジメントの軸としてコミュニティ・スクールを取り上げた。

ここでは、道徳教育の充実に向け、家庭・地域と共に豊かな心を育む様々な教育活動を、「学校運営」「学校支援」「地域貢献」というコミュニティ・スクールの三つの機能を視点として見直すことで、校長の役割や指導性について研究を進めることとした。

二 研究の視点

- (一) 学校運営協議会を生かし、組織としてつながる「学校運営」とは
- (二) 「つながろうとする心」を育む授業づくりに向けた「学校支援」とは
- (三) 学校と地域の双方の体験活動の充実をめざす「地域貢献」とは

三 研究の実際

- (一) 学校運営協議会を生かし、組織としてつながる「学校運営」とは
- ① 地域の様々な人材を確保しなが

ら学校運営協議会を設置し、学校のプロジェクト型校務分掌とつながりながら学校の取組を推進する。

- ② 教職員と地域のつながりをめざした熟議を開催し、共に学校の取組を協議することで教職員の意識改革を図る。
- ③ 地域の方が来校しやすくなるために、学校での拠点づくりとして「つなぐ場所」を設置する。

- (二) 「つながろうとする心」を育む授業づくりに向けた「学校支援」とは
- ① 家庭・地域や国際教育・伝統文化教育・道徳を関連させた「世界スカウトジャンボリー」の取組を、企画段階から地域と共に協議し運営する。
- ② 学習支援ボランティアを活用した道徳の授業づくりにおいて、子どもたちと地域の人をつなぐことにより、子どもたちが資料や地域の人をより深く理解する。

- (三) 学校と地域の双方の体験活動の充実をめざす「地域貢献」とは
- ① 校内に設定した学校と地域の接点



学習支援ボランティアを活用した授業

(三) 学校と地域の双方の体験活動の充実をめざす「地域貢献」とは

- ① 地域と共に計画する校内活動の花壇作り、校外活動の茶摘み・茶もみにおいて、地域の伝統文化の継承と共に子どもたちとの活動が地域の人の喜びにもつながる。
- ② 新旧住民の一体化という課題をもつ地域において、敬老会等での高齢者とのつながりづくりが地域の課題の解決にもつながる。

四 校長の役割

- (一) 学校運営協議会を生かし、地域と教職員をつなぐ組織や協議の場づくりを行う。
- (二) つながりを育むための、企画段階からの地域や学校運営協議会との関係づくりをする。

- (三) 校内に設定した学校と地域の接点

となる拠点づくりとその周知や運用を図る。

- (四) 地域の特徴（ひと・もの・こと）をつかみ、教育活動と地域をつなぐための人間関係づくりを行う。



茶もみの仕方の伝承

五 おわりに

国も山口県も、学校が家庭や地域と連携・協働を図り、地域で子どもを育てることを推進している。

現在、コミュニティ・スクールは県内の全ての小学校に設置されており、全ての学校に共通する組織として今後より一層の活用が求められる。

本研究から、豊かな人間性を育むことに向けても、校長が「つなぐ」という意識をもつことにより、コミュニティ・スクールは教育課程全体の見直しにおける有効なツールになると確信した。

研究紹介

健やかな体

健やかな体を育む

カリキュラムマネジメント

「連携を生かした「健やかな体」の育成」

上関町立上関小学校長

沖 中 直 樹



一 はじめに

本支部では、子どもたちの「健やかな体」を育成するために、学校間や家庭・地域、関係機関と連携した取組に視点をあてて研究に取り組んできた。熊毛郡は、三町にまたがるため、各町の実態や地域性などそれぞれの特色を生かした実践事例を持ち寄り、その中で校長の役割と指導性について探り、その成果や課題を共有することで、今後の取組の更なる充実を図りたいと考えた。

二 研究の実際

(一) 他校・町教委との連携による規則正しい生活習慣の確立

- ① 町全体の組織的な取組として
 - ア 各校の取組の情報交換
 - イ 教員の意識改革（町内の全小中学校を「一つの学校」という視点で）
 - ウ 町教研組織の活用
- ② 規則正しい生活習慣の確立

ア 「身に付けよう四十のポイント」

- イ 「小学生二十の心構え」
- ウ 成長診断テスト
- ③ 安心して学ぶことができる学習習慣の確立
 - ア 授業づくりの水準化
 - イ 安心して学べる環境

(二) 地域との連携を生かした食育の推進

- ① 学校と地域の思いや願い
 - ア 学校の取組
 - ・ 食育の推進
 - イ 地域の食文化の理解
 - イ 地域の思いや願い
 - ・ 漁業や農業への理解促進
 - ・ 郷土愛の育成
 - ・ 学校支援
- ② 親子料理教室の実践
 - ア 関係機関との事前協議
 - イ 漁協等の指導による調理取組に関する情報発信
 - ウ 取組に関する情報発信

③ 実践を振り返って



親子料理教室の様子

(三) 保護者との連携による学校林の整備・活用

- ① 子どもの遊びに対する思いの共有
 - ア 保護者の願い
 - イ 教職員の思い
- ② 維持管理に向けた取組
 - ア 財源の確保
 - イ 保護者、地域の協力
- ③ 学校林遊びを通じた児童の変容
 - ア 自然とふれあう機会の増加
 - イ 体力の向上
 - ウ 危険を回避する力の向上

三 校長の役割

- (一) 取組の必要性についての理解促進
- (二) 校内の要となる人材の育成
- (三) 地域の人材・関係機関との連携
- (四) PDCAサイクルによる取組の

四 成果と課題



学校林遊びの様子

- (五) 充実
 - ・ 情報発信による取組の周知、啓

- (一) 成果
 - ① 幼保・中学校と連携し、一体となった生活習慣づくりを推進することができた。
 - ② 取組を通して児童・教職員・保護者・地域住民の意識の変容がみられた。
 - ③ 町内の教職員組織を効果的に活用することで、各学校で一定水準の指導ができてきた。
 - ④ 地域や関係機関との連携を強化することができた。
- (二) 課題
 - ① 学校や地域の実態に応じた取組の工夫と継続が必要である。
 - ② 子どもを取り巻く環境の変化への対応が求められる。

研究紹介

研究・研修

学校の教育力を向上させる

研究・研修の推進

「教職員をつながりの中で育てるための
校長の役割とリーダーシップについて」

周南市立鹿野小学校長

中原 誠 輔



一 はじめに

山口県では、今後十年間に大量の退職者が見込まれ、教職員の世代交代が避けては通れない状態となっている。それに伴って、いわゆる学校の教育力の低下が懸念されており、組織としての学校全体での教育力の維持・向上が極めて大きな今日的な課題となっている。

そこで、周南支部では、いろいろなつながりの中で人材育成を図りながら、学校組織全体としての教育力を向上させることをめざし、市内各小学校二十七校の現状をきちんと認識しながら共通したいくつかの実践を深め、校長としての役割を探ることにした。

二 研究の視点

- (一) 校内研修の充実に向けた研修体制の整備
- (二) 小中連携を活用した校内研修の深化・充実
- (三) 地域連携を活用したマネジメント



部会ごとの協議の様子

三 研究の実際

- (一) 校内研修の充実に向けた研修体制の整備
 - ① 課題解決意識を高める自己目標シートを活用した面談の実施
 - ② 自校が抱える課題解決への組織づくり

力向上

- ③ ニーズにあった定期的な研修等による研修意欲を高める組織づくり
- ④ 学力向上推進リーダーや学力向上推進教員を活用した研修意欲を高める環境づくり
- ⑤ 自主的な授業公開の取組等による自主的な研修組織づくり
- (二) 小中連携を活用した校内研修の深化・充実に向けた研修体制等の整備
 - ① それぞれの中学校校区の実態に応じた具体的な共通目標の設定
 - ② 学校間のきめ細かな情報交換場の設定
 - ③ 全教職員の参加による小中連携研修会の開催
 - ④ 小学校教職員による中学校の授業参観の実施
 - ⑤ 児童生徒同士の交流の場の設定

四 校長の役割

- (一) 地域と学校の双方による取組の活性化
- (二) 校内研修の充実に向けた体制づくりにおける校長のリーダーシップ
- ① 教職員の研修への意欲を高める研

修方法の工夫

- ② 自主的に研修する組織体制づくり
- (二) 教職員の意識改革と有意義な小中連携を推進するための校長の役割
 - ① 義務教育九年間を見通した連携・協力体制づくり
 - ② 自校にふさわしい連携システムづくり
- (三) 教職員及び地域住民の意識改革とより有意義な地域連携を推進するための校長の役割
 - ① 学校運営協議会を生かした連携活動の活性化
 - ② 地域の教育力を活用した取組の推進

五 おわりに

研究の成果としては「教職員による新たな企画・実践・研修が展開された。」「児童の中学校に対する安心感・期待感が高まった。」「教職員の企画力・説明力・調整力が向上した。」等があげられる。一方、課題としては「校内研修を支援、促進していく役割を果たす人材の育成が急がれる。」「小中連携を推進するための具体的な方法の工夫や条件整備が急務である。」「教育活動と地域活動のバランスを考慮した学校経営が求められる。」等があげられる。今後とも、学校組織、小中連携、地域連携のつながりの中で、人材育成を意識しながら学校の教育力の向上をめざしていきたい。

研究紹介

リーダー育成

学校運営の中核を担う人材を 校長としてどう育てるか

～学校教育への展望をもち、
実践力のあるリーダーの育成をめざして～

山口市立良城小学校長

西元良治



一 はじめに

教員の大量退職時代を迎え、県内の学校現場では、今後十年間で現職教員の約四十%が若手教員に入れ替わることが想定される。そのため、校長として学校運営の中核を担うミドルリーダーや将来の管理職人材をどう育成していくかが喫緊の課題となっている。

そこで、本支部では、標記のテーマを設定し、計画的なリーダー育成を進める過程で、リーダーの資質として「三つの力」を選択し、その力を具現化するための「三つの場」におけるリーダー育成の研究を進めた。

二 山口支部の取組

- ① 研究部からプロット案（四つの場）を提案し、各校の実態調査
- ② 実態調査を基に、ワールド・カフェ方式で自校の取組の情報交換
- ③ 外部講師による企業での人材育成についての講演
- ④ 四部会に分かれワークショップ

形式で具体的な取組や課題を協議

- ⑤ 研究部で再検討し、新プロット案（三つの場）の確定

- (一) 実態調査による課題把握
- ① 教員の年齢構成
- ② 各主任の年齢構成
- (三) リーダーの育成過程
展望 ↓ 実践 ↓ キャリア・アップ

三 リーダー育成のための校長の役割

四部会での協議の結果、「ねらい」を具現化するため、育てたいリーダーの資質として、「三つの力」（人間力、実践的指導力、経営力・運営力）と、それを具現化するために「三つの場」（研修、校内組織、外部組織との連携）に集約した。

- (一) リーダーの資質「三つの力」
- ① 「人間力」 見抜く力、忍耐力、説得力、人間的魅力等
- ② 「実践的指導力」 企画・調整力、授業力、生徒指導力等
- ③ 「経営力・運営力」 構想力、推

進力、交渉力、マネジメント力等

- (二) 具現化するための「三つの場」
- ① 「研修の場」 得意分野を生かしたミニ研修、若手教員の自主研修等
- ② 「校内組織の場」 校務分掌の工夫、学校運営組織の工夫、OJTの工夫等
- ③ 「外部組織との連携の場」 大学との連携、地域協育ネット協議会との連携等



風景 協議による人材育成講演
上：研究部での協議風景
下：外部講師による人材育成講演

四 成果と課題

次の(一)～(三)の観点から、成果と課題をまとめた。

- (一) 展望
学校組織の数年後を見通した計画的な人材育成
- 【成果】適切な役割と責任感により、ミドルリーダーの意欲向上につながる。また、ベテラン教員の存在感の高まりや若手教員の将来の目標設定も図ることができる。

【課題】教員の年齢構成や人材等に制約される。

- (二) 実践
学校内外の人的・環境的資源を活用した効果的なリーダー育成の推進
- 【成果】地域連携を通じた企画運営力や連絡調整力の伸長が期待できる。
- 【課題】小規模校では、特定教員への負担増が懸念される。
- (三) キャリア・アップ
将来の管理職候補となる人材育成の推進
- 【成果】学校運営等の実務を通して、経営ビジョンや学校課題の共有を図ることができる。
- 【課題】管理職の魅力をどのように伝えていくか。

五 おわりに

ミドルリーダーの育成については、校長が教員の資質能力に応じ、計画的に様々な校務分掌を経験させていくことが必要である。

さらに、学校運営の面白さややりがいを感じさせ、自身のキャリアアステージについて意欲をもたせるように校長から働きかけることによって、管理職候補につなげていくことができる。また、管理職として、学力向上や地域協育ネット等の今日的課題解決のためには、県・市教育委員会との連携も欠かせない。今後、新しい時代を担う人材育成に積極的に取り組んでいきたい。

支 部 情 報

大 島 支 部

小さな支部、小さな学校のよさを生かして

「この仕事はあなたでなければできないことですからお願いします」そう云われるとどんなちいさなことでも誇らしい気持ちでやれます」

これは、周防大島町出身で戦後の歌謡界を代表する作詞家の一人である星野哲郎さんが書いた「そよかぜ」という詩の冒頭部分である。

わたしたち大島支部は、小学校十一校の内、各学年一学級の学校が三校、その他の八校は、全て複式学級を抱える学校である。児童数が少なく、したがって、職員数も少ない。離島の学校も二校あり、不便なことが多い本支部ではあるが、小規模であることを、マインナスにとらえるのではなくプラスととらえ、小さい学校のよさである「毎時間できる少人数指導の充実」「機動力を生かしたKS学習（複数の学校の児童が集まって学習する拡大集合学習の略）の推進」「ICTを活用した授



本年度で休校となる情島小学校での校長会の様子

業づくり」など、小規模校の特色を最大限に生かした取組を推進している。

また、本年度の大島支部は、十一校中、六校の校長が新任となり、大きく若返ったフレッシュな支部でもある。ベテラン校長と新任校長が、「チーム大島」として、がっちりとしたスタラムを組みながら、町の教育方針である「自立（自ら生きる力）・協働（ともに生きる力）・創造（よりよく生きる力）」ふるさとに誇りがもてる人づくり、地域づくりの具現化に向けた取組の充実に努めている。

星野哲郎さんの「そよかぜ」の詩にあるように、「周防大島でなければできないこと」「周防大島だからできること」を校長会としても常に念頭に置きながら、小さな支部、小さな学校としての「誇り」をもって、支部の運営や日々の学校経営に邁進していきたいと考えている。（城山小学校 前田憲明）

初 心



宇部市立西宇部小学校校長 田中敬二

「緑がいっぱい学校の学校ですね。」「運動場が広くて素敵ですね。」本校を初めて訪れた人は、口々にそんなことを言われる。

「この校舎で勉強を教え、この運動場で運動会を行うんだ。」身が引き締まったことを今も思い出す。

地域の方々と面識をもつことができるようになって、その驚きはますます大きくなった。ある方には校庭にドングリの木がある理由を教えていただいた。子どもたちが遊べるよう大きな実をつけるドングリンなのだそう。施肥をちゃんとするよう言っていた。校地の斜面に桜を植えてくださった方には、「校長、草を刈れ。」とお叱りのような励ましもいただいた。見守り隊の方々には、ベソかいて登校できない一年生を何回も学校まで送っていただいている。

「ああ・・・みんな西宇部小学校の子どもたちを愛してくださっているんだ・・・。」

縁あってお仲間に加えていただいたこの身である。子どもたちのために尽力したい。

波の音と決意



下関市立吉母小学校校長 山本桂子

「ザッ、ザッ」校長室の窓の外から聞こえてくる。四月当初は、全く気が付かなかったのだが・・・しばらくしてようやく気が付いた。なんと素敵な音なのか、心が癒やされる音・・・それは、本校のすぐ側にある吉母の美しい海から聞こえる波の音である。

全校児童は九名。こんなにも少ないのに教室からは、大きな声で校歌を歌ったり、音読をしたりする声が聞こえてくる。元気いっばいの子どもたちである。

本校は、「地域の学校」として、数々の特色ある取組を進めている。特に北九州市立合馬小学校との交流は今年で五十七年目を迎えた。春には合馬小から大量のたけのこが届き、夏には、両校児童が吉母の海で地引き網体験をする。三世代続くこの交流は、吉母小にとって、まさに本物の宝になっている。

私は、『どんなに極小規模校であっても、一番の輝きを放つことはできる』と思っている。数々の『吉母小の宝』を大切に守り続けるとともに、児童・教職員一人ひとりのよさがキラリと輝く学校を作りたい。

静かな波の音が、校長としての熱い思いを日々起こさせてくれている。

新 校 長 の 声



谷口 顕一郎 × 見初小学校
五年生「凹（へこ）み彫刻をつくろう！」

これは私が本年度着任した宇部市立見初（みぞめ）小学校の玄関ロビーに掲示されていた「ときわミュージアム」のリーフレットの見出しである。「凹み彫刻?」、新年度準備をいかに進めるかで一杯であった頭の中は、疑問符に取って代わられた。

ステレオタイプな彫刻イメージしかもっていないものだから、「凹み」と「彫刻」とがどうつながるのかという疑問しか湧かなかったのである。説明には、「子どもたちは、総合的な学習の時間の中で、自分が行ってみたい国について調べ、自然や歴史が作り出したまちの形から自分だけの凹みを見つけ出し、その形を折りたたんだり、角度を変えて組み合わせることで、新たな形の表現として展開しました。」とある。ますます謎めいてきた。

しかし、湖水ホールを訪れ、謎が解けた。そこには、小学生が創ったのかと驚くような出来ばえの数々の立体作品があった。子どもの感性のすばらしさに感動した。作品制作にあたり、作家から手ほどきを受けたという。子どもたちはその創作プロセスに触れ、おそらく「あゝ！」と感嘆の声をあげたことだろう。

『緑と花と彫刻のまち』である宇部市は、ふるさとの彫刻に対する愛着を深めるとともに、鑑賞や造形、共同制

作、作品の発表などを通じて「感じる／表現する」ための基礎的な力を育てることを目標として彫刻教育推進事業を展開している。本校は二〇一一年度にモデル校に指定されて以来、彫刻教育に継続して取り組んでいる。「ときわミュージアム」の学芸員と担任が協議して、教育課程に彫刻に関する内容を位置付けて授業を構想・実施している。

継続して彫刻教育に取り組んできたことにより、自分の考えや思いを素直に伝える子も増えてきた。「正しい近道を見つげるためにわざわざ遠回りする必要がある（エドワード・オールビー）」という言葉がある。今、道徳教育の充実、学力・体力向上、地域とのつながり等、子どもたちに付けたい力は多岐に渡っているように見えるが、基盤は「感じる力」「感性」であろう。すべてに通ずる基礎体力とも言える「センス・オブ・ワンダー」神祕さや不思議さに目をみはる「感性」を磨くことは、必要な「遠回り」である。宇部ならではの感性を磨くことのできる学び舎づくりに励みたい。

センス・オブ・ワンダーを磨く 宇部市立見初小学校長 伊藤 隆

目長耳飛

野島、小中併設校のよさを生かして 防府市立野島小学校長 西嶋 高成



野島小・中学校は、三田尻港の沖約十五kmに浮かぶ野島にある小中併設校である。豊かな自然に囲まれた野島には一年を通して釣り客や夏の海水浴に多くの人が訪れる。昔はつつじが島を覆い、茜色に染まっていたという言い伝えから、別名「茜島」とも呼ばれている。

本校の大きな特徴の一つは、「茜島サイドスクール」事業である。防府市内の児童生徒を対象に「豊かで美しい自然環境、心温まる教育風土に恵まれた野島小・中学校で学校生活を送ることで、心身の成長を図るとともに、心豊かに生きる力を培うこと」を目的として防府市教育委員会が平成十三年度から実施している。これまでに一〇八人の児童生徒を就学変更により受け入れ、小規模校だからできる徹底した個別指導に取り組んでいる。また、野島だからできるシーカヤック、鯉料理体験等の海の体験活動、野島盆口説きや野島太鼓等の伝統文化伝承活動により、人間的なふれあいを通して心身の成長や豊かな心を

を育てている。全教職員共通理解のもと、子どもたち一人ひとりの心に寄り添い、よさを認め個性を伸ばし、自己肯定感や自己有用感を高める指導に力を入れている。

もう一つの特徴は、小中連携教育である。学校行事、総合的な学習の時間の小中合同学習だけでなく、教科指導で小中乗り入れ授業を行っている。教員が専門性を発揮できる場であると同時に、小学校教員にとっては中学校卒業時の進路を意識した指導や生徒指導等、中学校教員にとっては子どもの思考に沿った授業づくりやきめ細かな支援と評価等を経験することができ、資質能力向上の機会にもなっている。異校種の見えなかった部分を、直接かわることでよさや改善点が発見でき、自分の校種の指導に生かすこともできる。大切なことは、中学校卒業時に生きる力を身に付けさせ義務教育としての責任を果たすことである。そのためには、九年間の枠組みの中で、小・中学校が互いの立場を尊重し、共通の教育観にたつて指導しなければならぬ。

昨年度、中学三年生の受験高校から届いた可否通知書開封の際、緊張で手が震えた。進学が決まった生徒の笑顔を見た時、子どもの夢の実現のためには、成長過程に切れ目を作らず、自信をつける教育が必要であると痛感した。子どもたちが通学してよかったと思える野島小・中学校にしていきたいと考えている。

下松市は、下松フィルム・コミッションによる自主映画づくりが盛んだが、「映画」づくりの狙いは何か。また、映画製作により、どうまちづくりや街の活性化につながっているのか、伺いたい。また、地域の子どもたちはこの事業にどのように関わっているのかお聞きした。

***「フィルム・コミッション」とはどんな組織なのですか？**

フィルム・コミッションとは映画やテレビドラマを誘致し、撮影をしてもらうことで、観光や活性化に役立てようという組織のことを言います。

***下松フィルム・コミッションの活動はユニークですね。**

誘致活動に取り組んではいますが、映画やドラマの撮影は、そう頻繁にある訳ではありません。下松フィルム・コミッションでは「行動するフィルム・コミッション」を目指し、下松市の魅力を全国に発信しようとこれまで「恋」「10ミニッツ」という二本の映画を自主製作しました。

特に「恋」は、下松市内の映画館で公開され、二週間で三千人を動員するヒットを記録したあと、東京でのホール上映、神戸市の映画館上映を経て、今年の四月には東京新宿の映画館で公開され、大手週刊誌にも大きく取り上げられるなど、評判になりました。

***大橋さんはどう携わっているのですか？**

私はLD（学習障害）の当事者で、

小学生の頃からそれで悩み、いじめにも遇いました。そんな私にとっての救いは両親や先生、友人の励ましと、何より「映画」でした。生きる希望や勇気を「映画」からたくさんもらいました。それまでも山口県で撮影された映画の宣伝やロケ地探し、エキストラ集めなどのお手伝いをしていたので、その経験を生か

探訪シリーズ **この人 この歩み**
「映画」でまちを元気に



下松フィルム・コミッション
アドバイザー

大橋 広宣 さん

***どんな想いで活動されていますか？**

下松市では前市長の井川成正さんが「二十一世紀は心の時代」と位置付け、「笑い・花・童謡」を柱にした「日本一人情豊かなまちづくり」を進めてこられました。これは「恋」「10ミニッツ」の長澤雅彦監督が仰っていることなのですが、「映画には下松市の豊かな自

然や風景、特徴も出てくるけれども、我々が最も描きたいのは市長をはじめ、下松市民が大切にしてきた人が人を通して「心」だ」と。私も同じ想いですし、これまで製作した二本にはそんな「心」がきちんと描かれている作品になったからこそ、全国的な評判になったのだと思っています。

***これからどう展開していきますか？**

映画・映像は不特定多数の方々と共に共感し、想いを共有できる媒体です。自主製作はもちろんです。映画・映像を通して地域の魅力を発信できる、あらゆる事業の展開をこれから模索していきたいと思っています。できればそこに地域の子どもたちも参加して頂き、映像を通しての魅力を再発見できる事業にも取り組んでいきたいら、と思っています。



映画「恋」より／©下松フィルム・コミッション

ある出版社の「住みよさランキング二〇一六」によると、下松市は全国十八位の評価を受けた。ものづくりのまち下松が、人とのつながりも大切にしたい一つの取組である。学校教育の中でも、人との絆を大切にしたい、郷土に誇りと愛着をもった子どもたちを育てていきたいと切に思った次第である。（久保小 大田典子）

本部 だより

平成二十八年度、新会員四十七名を迎え、計二百九十七名からなる小学校長会の総会が、去る五月十日に開催された。役員改選が行われ、新役員の説明による活動方針及び事業計画、予算、各専門部の提案等が承認され、本年度の諸事業がスタートした。

昨年度は、十月に全国から二六〇〇名を超す校長先生方を迎え、第六十七回全国連合小学校長研究協議会山口大会を開催した。大会主題「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す 小学校教育の創造」に基づき、「志を高くもち 未来へ向かって共にたくましく生きる子どもを育てる 学校経営の推進」を副主題として、五つの研究領域、十三の分科会において研究を深め、多くの成果と高い評価を得ることができた。

今年度は、昨年度の全国大会の実績を踏まえた上で、従前の五つの研究領域、十の分科会に戻しての新たなスタートの年となる。各学校においては、次の教育課程の改訂をはじめとする様々な学校課題に対する準備が必要な時期に来ており、校長としてのより一層のリーダーシップが求められている。本県の小学校教育の質を一層向上させ、研究成果を教育実践に直結する内容として共有することができるよう、各支部ごとに研究を深め、全会員が力量を高めていくことが必要である。